

Title	李商隱の無題詩について：その恋愛詩を中心に
Sub Title	Li Shang-Yin's love poems in Wú tí shi (Untitled poems)
Author	詹, 満江(Zhan, Man-Jiang)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1983
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.45, (1983. 12) ,p.67- 87
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00450001-0067">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00450001-0067</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 李商隱の無題詩について

——その恋愛詩を中心に——

詹 滿 江

一

李商隱（八一—八五八）は、字は義山、懷州河内の出身で、晩唐を代表する詩人である。その詩風は艶麗をもって知られ、温庭筠・段成式と並んで三十六体と称された。しかし、一連の無題詩に代表される恋愛詩は、温庭筠・段成式の艶冶な詩風とは別に評価されるべきであろう。李商隱の恋愛詩には詩人自身の現実に密着した真実の心情が吐露されていると思われるからである。また、それゆえに彼の詩は恋愛詩と呼ぶに値するのである。いま、李商隱の無題詩について、特にその恋愛詩を中心に考察を加えてみたい。

李商隱の無題詩は、すでに唐末より模倣者が現われている。唐末の唐彦謙・王周・韓偓・呉融らをはじめ、宋初の楊億・劉筠・錢惟演らも、『西崑酬唱集』に「無題」と題して詩を詠じている。韓偓などは、父の韓瞻（字は畏之）が李商隱と同年であり、李商隱の「韓冬郎（韓偓のこと）即席に詩を爲り相送る。一座盡く驚く。他日余方に八連宵侍坐し徘徊すること久しVの句に老成の風有るに追吟せんとす。因って二絶を成して寄酬し、兼ねて畏之員外に呈す」と題す

る詩に「十歳にして詩を裁ち走馬のごとく成る」の句があることから、幼少の頃、即座に詩を作り、李商隱がそれに酬唱したことがわかる。李商隱の無題詩は韓偓のようにごく近い関係の詩人が倣っていることから、つとに追隨者を得ていたといえよう。

宋初、西崑派の詩人たちによってもはやされていた李商隱の詩は、歐陽修が西崑体の弊害を説くに至って次第に顧みられなくなり、以後しばらく閑却され、ついには金の元好問が「論詩絶句」の中で「望帝の春心杜鵑に託し、佳人の錦瑟華年を怨む。詩家總べて西崑の好きを愛するも、獨り憾むらくは人の鄭箋を作る無し」と詠じ、李商隱の詩に注を施す人がないことを嘆くまでになった。

結局、李商隱の詩集に注が施されたのは、明末清初になってからといつてよいであろう。それ以前、劉克・張文亮が注したといわれるが、それらの注は今に伝わらない。明末清初の釈道源の注も、いま朱鶴齡の注本に僅かに見られるだけである。以後、次々と注釈家が現われるに及んで、李商隱の無題詩は、それまでと違った解釈がなされることになった。唐末宋初に模倣された「無題」の詩を見るかぎり、李商隱の無題詩は単に艷詩と受けとめられていたと考えられる。それが、清朝の注釈家たちによって、無題詩には寓意があると考えられるようになった。すなわち、男女の情に託して君臣のことを詠むという、いわゆる『楚辞』の「美人香草」の解釈がなされるようになったのである。それを示す端的な例として、呉喬の『西崑発微』が挙げられよう。それは李商隱の無題詩と、令狐楚・綯父子や王茂元、李德裕にかかわる詩だけに限って注が施されている。そして無題詩をもっぱら令狐楚・綯父子とのことを寓しているとするのである。

ただ、紀昀だけは諸注釈家の無題詩寓意説に対して不賛成の意を表わしている。

無題諸作有確有寄託者。來是空言去絕踪之類是也。有戲爲豔語者。近知名莫愁之類是也。有實有本事者。如昨夜星辰昨夜風之類是也。有失去本題而後人題曰無題者。如萬里風波一葉舟一首是也。有失去本題而誤附于無題者。如幽人不倦賞一首是也。宜分別觀之。不必概爲深解。其有摘詩中字面爲題者。亦無題之類。亦有此數種。皆當分晰。<sup>(1)</sup>

無題諸作確かに寄託有る者有り。「來るとは是れ空言去りて踪を絶つ」の類是なり。戲れに豔語を爲す者有り。「近く知る名は莫愁」の類是なり。實に本事有る者有り。「昨夜の星辰昨夜の風」の類の如き是なり。本との題を失ひ去りて後人題して無題と曰ふ者有り。「萬里の風波一葉の舟」一首の如き是なり。本との題を失ひ去りて誤って無題に附さるる者有り。「幽人賞するに倦まず」一首の如き是なり。宜しく分別して之を觀、必ずしも概ねは深解を爲さざるべし。其の詩中の字面を摘みて題と爲す者有るも亦た無題の類にして、亦た此の數種有り。皆當に分晰すべし。『玉谿生詩說』卷上)

紀昀は、無題詩をもつばら寓意の作と見做して穿鑿につとめる注釈家たちの態度に対し、無題詩には確かに寓意の作があるにはあるが、そればかりではなく、本事とかかわらない艶体の詩もあり、本事のある詩もあり、失題の詩も混ざっている、と具体例を挙げて論じ、あまり寓意を読みとろうと深読みすべきではないと主張している。詩の中の字を題とする借題詩と同様で、無題詩ばかりを寓意のある詩として特別に見るにはあたらないのである。紀昀の考えは當時の注釈家たちの中にあつては、かなり客観的なものであつたと思われる。

無題詩を考へるとき、まず顯著な特色として、艶詩がほとんどであることに注目すれば、紀昀が考へたように、艶詩でない作は本来無題詩ではなく、失題の詩であることが考へられる。しかし、無題詩が本来艶詩だけであると決める裏付けはない。無題詩がどのような意図をもつて作られたかは、ただ艶詩が多いということだけからは推測するこ

とはできない。李商隱の他の詩と区別できる特異性として、ただ艶詩であるというだけでは不十分だからである。無題詩に積極的な意味での意図や特異性を見出せない以上、いまのところ無題詩を特別な作品群として文学的に位置づけるのは無理なようである。

紀昀の指摘の中で、もとの題が失われて無題の詩と続いていたために無題詩になってしまったものがある、というのは、無題詩の連作について見た場合、注目すべき指摘のように思う。紀昀が連作ではないと考えた「無題二首」の第一首は「八歳儻かに鏡に照らし、長眉已に能く畫く」で始まる詩で、少女が成長する過程を年ごとに詠んだ楽府体のである。そして、その第二首は「幽人賞するに倦まず、秋暑招邀を貴ぶ」で始まる五言律詩で、その内容も、池辺の実景を詠じていて、第一首と連作としての結びつきを見出せない。馮浩は後の一首を「失題」と改めている。<sup>(2)</sup> 無題詩でないのに無題詩と連作にされたしまったといわれるのとは逆に、本来無題詩だったのに別の詩と連作にされたしまったといわれるものもある。馮浩は「蝶三首」の第二・三首を『唐音統籤』に従って「無題二首」と改めている。<sup>(3)</sup> 『唐音統籤』卷五六六にその第一首が「蝶」と題して見え、卷五七二にその第二・三首が「無題二首」と題して見えるのである。「蝶三首」の第一首は五言律詩であるが、第二・三首は七言絶句であり、詩体が異なるということもあるが、やはりさきの「無題二首」のように連作としては内容に隔たりがある。第一首は蝶について詠われているが、第二・三首は蝶に關係のない艶体の作である。また、張采田は「畏之に留贈す三首」の第二・三首を「無題二首」としている。<sup>(4)</sup> 馮浩は詩題を改めてはいないが、その注の中で、この三首は誤って連作となつたものであることを指摘する。<sup>(5)</sup> その例証として馮・張二氏ともに、馮評『才調集』(卷六)にその第二首が選ばれていて、その馮舒の評に「俗本改めて無題詩に作る」と見えること、趙宦光校『萬首唐人絶句詩』(卷二八)に、その第二・三首が「無題二首」と題して録されることを挙げてい

る。もともと、馮舒は無題詩となっている方が誤りであると考えているが、馮浩はそれを否定する。この連作も「蝶三首」と同様に、第一首が七言律詩、第二・三首が七言絶句であり、詩体が異なるし、第二・三首について、馮浩の注に「題既に當に無題に作るべし。則ち并びに畏之の爲に發するに非ざるなり」と言っていて、やはり連作として考えるには問題があるとされる。連作で詩体が異なることは、例えば「漫成三首」の第一首が七言絶句、第二・三首が五言絶句であり、三首とも李商隱が自分を何遜に比していることで連作としての繋がりをもってするように、必ずしも本来連作だったのかどうかを疑う理由になるものではないが、詩の内容の齟齬は、見過ごしにできないことであろう。「蝶三首」と「畏之に留贈す三首」が、果して無題詩とどのようにかかわるのか、容易にはわからないが、無題詩の成り立ちを考える上で、一つの手掛りにはなりそうに思われる。もし、李商隱自身が「無題」と題していたとすれば、無題詩の輪郭は今日残されているような不明瞭な状態にはならなかったのではないだろうか。少くとも失題の詩と「無題」の詩とが区別されていたはずである。無題詩の中に失題の詩が混ざっているかどうか、いまのところ実証的に調べる手立てが見出せないが、失題の詩が混ざる可能性はあろう。そして、無題詩が誤って別の詩の連作となってしまうということが、先に示したごとく起こりうるとすれば、無題詩について次のようなことが想像される。李商隱自身が作った無題詩と、失題・闕題の詩とが、題が無いという点で区別できない形で残ったのではなからうか。すなわち、李商隱は「無題」という題をつけて詩を作ったのではなく、作った詩に題をつけなかったのではないかと推測される。それゆえ、失題をも含めた無題詩のいずれかが、別の詩と一緒にされ、別の詩の連作となってしまうという誤りが起こりうる、と考えられる。今日見られる無題詩は、李商隱が本来無題詩として作ったものだけとはいえないであろう。

無題詩のほとんどは艶詩であるとしても、より細かく見てゆけば、その中にも質のちがいが現われてくる。先の紀昀の指摘のごとく、「戯れに豔語を爲す者」もあり、「實に本事有る者」もある。いま、特に注目したいのは、紀昀の指摘する後者の詩である。李商隱の詩に恋愛詩があると考えられるのは、まずはそうした詩があるからである。以下無題詩の中の恋愛詩とみられる詩を掲げつつ、その特徴を述べる。

昨夜星辰昨夜風 昨夜の星辰 昨夜の風

書樓西畔桂堂東 書樓の西畔 桂堂の東

身無彩鳳雙飛翼 身に彩鳳雙飛の翼無けれど

心有靈犀一點通 心に靈犀一點の通ずる有り

隔座送鉤春酒暖 座を隔てて鉤を送り春酒暖かなり

分曹射覆蠟燈紅 曹を分ちて射覆し蠟燈紅なり

嗟余聽鼓應官去 嗟あは余鼓を聽き官に應じて去り

走馬蘭臺類斷蓬 馬を蘭臺に走らせ斷蓬に類す（朱鶴齡箋注『李義山詩集』に拠る。以下同じ。）

うたい出しの首聯出句がすでにことさら個人的な感慨であることを感じさせる。どのような星を見、どのような風にかれたかは、作者自身の心の中にしまいこまれ、読者にはわからない。首聯出句はいわば排他的なモノローグといえる。この詩にもし題があつて、時間・場所・状況などが具体的に示されていたならば、うたい出しがこれほど秘めやか

な感じを与えることはなかったであろう。やはり無題だからこそ、こうした秘めやかな雰囲気が醸されたといえる。首聯落句は場所を表現しているが、「書樓」と「桂堂」、「西（畔）」と「東」とが対になっていて、李商隱が好んで用いる当句有対の手法<sup>(6)</sup>であり、出句の排他的な時間の表現に対応して、やはり具体的な表現ではない。頷聯は、おそらくある女性と密かに心を通わせたことを表現していると思われる。身には色どり鮮やかな二羽の鳳のような翼は無いが、というのは、想う女性と現実においては結ばれないことを暗示しているのかもしれない。それでも心は霊犀の角に一筋の線が貫かれているように互いに通い合っていた。頷聯の表現は従来の艶詩には見られない巧みな心理描写となっていると思う。この聯は従来の觀念的な女性の側の怨情の表現の枠を全く越えている。頸聯は宴席で藏鉤や射覆のゲームに興じ、酒を酌み交わすさまが活写されている。そして尾聯は、曉の太鼓が鳴るのを聴き、もう任務につくため行かなければならない。蘭台すなわち秘書省に馬を走らせる我が身は、まるで風に根を吹きちぎられて飛んでゆく根なし草のようだが、と結んでいる。この詩は李商隱自身、すなわち男性の側から、想う女性のもとを去る名残り惜しさを表現していることからみても、六朝以来の艶詩の枠をはみ出しているといえよう。男性の側から女性への想いをうたうことは、禁忌といってもよいほどであるし、士大夫の立場からすれば、このような詩を公然とうたったとは思われない。まして、本来最も大切に考えられるべき職務さえも、それに赴くことが根なし草のように感じられるなどと表現しているとすればなおさらである。ここで恋愛詩をことさらに艶詩と区別するのは、いま述べたことに基づくのである。この詩で李商隱は敢えて自身の恋情を率直に表白している。無題詩に何か意図があるとすれば、この詩などは公然とではなく、ごく私的な立場で作られたからこそ無題なのだろうと考えられる。となれば、無題詩は積極的な主張をもって作られたというよりは、むしろその逆に、公けにしないという内向した消極的な意図があったと考えるほうが妥当であろう。



この詩は二首連作の第一首で、その第二首は次のごとくである。

聞道閨門萼綠華 聞くならく閨門の萼綠華

昔年相望抵天涯 昔年 相望み天涯に抵る

豈知一夜秦樓客 豈に知らんや一夜 秦樓の客

偷看吳王苑內花 偷み見る吳王苑内の花

天界の仙女萼綠華のような美女がいると聞いて、以前、想いこがれて天の涯までも行つて探そうとしたものだった。あの夜ここ長安の高殿に招かれて、はるか離れた吳の地の美女西施のような女性を垣間見られようとは思ひもよらなかつたことだ。

第一首と関連づけて解釈することは可能ではあるが、もともと連作だったのかどうかやはり疑問が残る。密かに心を通わせることと、偷かに看ることとの相異は、詩の表現として問題にすることもないが、第二首の方は詠みぶりが第一首よりも技巧的であり、機知に富んでいるように感じられる。第一首の秘めやかで甘美な抒情に比べると、第二首は反対に公然とした雰囲気を感じられ、妓席での即吟の作のようにも受けとれる。無題詩の連作はやはりもう一つ連作としての落ち着きがないように思われる。

相見時難別亦難 相ひ見る時は難く別るるも亦た難し

東風無力百花殘 東風 力無く百花殘はる

春蠶到死絲方盡 春蠶 死に到りて絲方めて盡き

蠟炬成灰淚始乾 蠟炬 灰と成りて涙始めて乾く

曉鏡但愁雲鬢改 曉鏡 但だ愁ふ雲鬢改まるを

夜吟應覺月光寒 夜吟 應に覺ゆべし月光の寒きを

蓬山此去無多路 蓬山 此より去ること多無き路

青鳥殷勤爲探看 青鳥 殷勤に爲めに探り看よ

「なかなか会うことは難しいし、やっと会えれば今度は別れることがまた難しい」と、この詩もやはり、うたい出しが唐突なモノローグで始っていて、ごく私的な事情を感じさせる。首聯の落句は、春風もはや春の息吹きを伝える力がなくなり、春の花々は凋んでゆくばかりであることを詠じ、困難な恋のゆく末も春が終わるように避けがたい破局が待ち受けていることを象徴的に表現している。そして、春の蚕が死ぬまで糸を吐き続けることと、蠟燭が灰になるまで涙を流し続けることとで、連綿と続く恋情とかなわぬ恋の悲しみを表わし、さらに想う女性の姿を想像する。夜明けに鏡に向かえば、ただ会えない悲しみで髪も白くなりはいらないかと愁え、夜ひとり詩を口ずさみつつ月の光の寒々しさを感していることだろう。彼女の住む蓬山はここからさほど遠くはない。恋の使いの青鳥よ、私のために念入りに彼女の様子を探ってきてほしい。

この詩も「昨夜」で始まる無題詩のように、男性の側からの恋情を詠じたものと考えられる。おそらくは李商隱自らの現実の事情に結びついていると思われる。「昨夜」で始まる無題詩より詠みぶりははるかに象徴的で、明らかに本事と結びつく表現は見られないが、それでも、首聯出句の表現は、やはりある事情を感じさせ、それも人目を忍ぶ逢瀬の困難さ、辛さが表現されているゆえ、ただ紙の上で詠まれた詩ではあるまい。李商隱の恋愛詩の特色として、その感情表現の象徴性と、恋の喜びよりも悲しみを詠うことが指摘できるが、この詩はそれらの特色がことによく出ている。李

商隱の描く恋は或いは秘めやかさを、或いは困難な行く末を思わせ、いずれにしても抑圧され、否定された形で表現されている。しかし、その屈折を経て、それでもなおほとぼり出る恋情が、彼の恋愛詩の生命である。たとえば閨怨詩が、しばしばその隱喩として士大夫の不遭の嘆きを表現する手段となったりして、およそ観念的な感情表現にとどまり、形蓋化しているのとは、根本的に異なる。

來是空言去絕跡　來るとは是れ空言　去りて跡を絶つ

月斜樓上五更鐘　月は斜めなり樓上　五更の鐘

夢爲遠別啼難喚　夢に遠別を爲し啼いて喚び難く

書被催成墨未濃　書は成すを催さるるも墨未だ濃からず

蠟照半籠金翡翠　蠟照　半ば籠む金翡翠を

麝熏微度繡芙蓉　麝熏　微かに度る繡芙蓉に

劉郎已恨蓬山遠　劉郎　已に恨む蓬山の遠きを

更隔蓬山一萬重　更に蓬山より隔たること一萬重

この無題詩は四首連作の第一首であるが、この連作も、それぞれの詩の内容からみて、連作としてはっきりした関連が見出せない。この第一首と第二首とは七言律詩、第三首は五言律詩、第四首は七言古詩であり、詩体の相異があるが、それを別にしても連作としての有機的な関連は見出せないのである。

この詩も「來るといふのは嘘で、どこへ行ってしまったのか行方も知れない」と、唐突なモノローグが始まる。紀昀はこの詩を寓意のある無題詩の例として挙げているが、それを裏付けるに十分な拠り所がないかぎり、可能性として寓

意があることを全面的に否定はできないにしても、ことさらに寓するところを考えて読む必要はないと思われる。この詩は閨怨詩の趣きを感じさせるが、主体を女性とせず、作者李商隱自身とするほうが、うたい出しのおよそ個人的な状況に説明がつくように思う。少くとも、最初から閨怨詩を作ろうとして、嘘をつかれるというような特定の状況を設定したりはしないのではなからうか。紀昀が寓意の作と考えたのは、この詩が特別な事情を思わせ、しかも閨怨詩の形に詠まれているということから、ある事情を閨怨詩の形を仮りて詠んだと推測したからであろうか。しかし、閨怨詩という形にあまりこだわらないほうがよいと思う。むしろこの詩の背景として李商隱自身の事情が強く感じられることに注意したい。

待ちわびて月は傾き、高殿に居るまま五更の鐘を聞いてしまった。せめて夢で会えたらと思ったのに、夢の中でさ長の別れになり、泣くあまりあなたを呼んでも声にならない。それなら手紙を書こうとしたが、気ばかりあせて墨の擦りあがる間も待てないほど。蠟燭に半ば照らされた金の翡翠の模様も、麝熏のかすかに香る芙蓉の繡りも、いまひとりで見ててもあだな思いをつのらせるだけ。昔、漢の武帝は蓬山の遠いのを恨んだというが、いまの私はその蓬山の一万倍もあなたと離れているかのようだ。

この詩は「相見」で始まる無題詩と関連づけて考えれば、恋人との逢瀬が一層困難になってしまったことを想像させる。そうした関連を別にしても、やはり紙の上だけで詠まれた詩ではあるまい。

以上見てきた「昨夜」「相見」「來是」で始まる三首の無題詩は、いずれも李商隱の実際の動静をうかがわせるものである。しかし、その具体的事実には「無題」ということですっかり隠蔽されてしまっている。ただ具体的事実を隠すという点だけにかぎれば、それは李商隱だけに見られるわけではない。例えば、杜牧に次のような詩がある。

宣州開元寺<sup>(7)</sup>

松寺曾同一鶴棲

松寺曾て一鶴と同一に棲む

夜深臺殿月高低

夜深く臺殿 月高低す

何人爲倚東樓柱

何人か爲に倚らん東樓の柱

正是千山雪漲溪

正に是れ千山 雪溪に漲る

この詩は『三体詩』に選ばれていて、その釈元至の注に「或ひは月色の高低千山の雪の如しと謂ふは非なり。此の詩は乃ち雪後月霽れて樓に登り孤り賞す。昔日の歡遊を思ひ、今夕の侶無きを歎す。詳らかに詞意を味わへば、情思殊に甚し。首句に所謂鶴と同一に棲むは、恐らくは是れ婦人と同宿す。名を鶴に託する爾。唐人多く此の如し。」とある。女性のことをあからさまにせず鶴に託して表現しているという釈元至の考えに拠れば、この詩は本事を隠した詩といえよう。

李商隱の詩がことさら恋愛詩として考えられるのは、公けにすべきでない恋を密かに詩にうたうという点にだけあるのではない。杜牧の詩と比べるとなく、李商隱の恋愛詩には、恋のさ中に身を置いている人間の心理が直截に表現されているのである。象徴の手法がとられていても、やはり恋する者の率直な心情が流露している。

無題詩の中には、李商隱自身の事情に直接結びついているように思われる恋愛詩の他に、李商隱の恋愛観ともいえるべきものがわかれる恋愛詩がある。

颯颯東風細雨來

颯颯東風 細雨來り

芙蓉塘外有輕雷

芙蓉の塘外 輕雷有り

金蟾鑿鑽燒香入 金蟾 鑽を鑿み香を焼きて入り

玉虎牽絲汲井迴 玉虎 絲を牽き井を汲みて迴る

賈氏窺簾韓掾少 賈氏 簾を窺ひ韓掾少く

宓妃留枕魏王才 宓妃 枕を留め魏王才あり

春心莫共花爭發 春心 花と共に發くを爭ふ莫かれ

一寸相思一寸灰 一寸の相思 一寸の灰

さつと春風が吹き、雨が降り始め、芙蓉のある池の向こうでは軽く雷が鳴る。叙景ではあるが、雨ということ、楚の懷王と巫山の神女との恋をいう雲雨の故事を連想させる。「東風力無く百花残はる」という句が、恋の終わりを象徴的に表現しているのと同様、これも春雷は春の始まりゆえ、恋の始まりを象徴していると考えてよいであろう。頷聯は、具体的にどんな様子を描こうとしているのかわかりにくい、香を焼いたり、水を汲んだりしているからには、女性の部屋で恋人を迎へる用意をしているさまを想像させる。まさにこれから恋の花が開こうとしているように思われる。注目すべきなのは後半で、頷聯に用いられた二種の故事は、李商隱が認識した恋のあり方をうかがわせる。西晉の宰相賈充の娘と賈充の部下韓寿との恋は密会で始まり、モラルに反するものであったし、魏の曹植と甄逸の女との恋は、彼女が曹植の兄曹丕に嫁してしまい、結局実らなかつた。この詩の前半に描かれた恋の始まりの期待感に、ここで暗い影が射す。そして、恋心を花と争って開かせてはならない。一寸の恋は一寸の灰となるのだから、と結んでいる。「相思」はふつう恋慕の情をいうが、この詩においては「恋」という概念をあてはめたほうがよいと思われる。「錦瑟」の「望帝の春心杜鵑に託す」の句にみえる「春心」は、恋が不幸な結末に終わっても、連綿と続く恋心のことであり、この詩

でいう「春心」も「相思」が灰になって終わろうとも、抱き続けるはずの恋心をいうと思われる。不幸に終わる恋ゆえ、恋心を起こしてはならない、というのである。李商隱は恋の甘美な陶醉を決して手ばなしに描こうとはしない。礼教に背き、それゆえ不幸に終わらざるをえない恋の現実を常に忘れない。この詩にはそうした現実認識がことに強く現われているのである。

重幃深下莫愁堂 重幃 深く下す莫愁の堂

臥後清宵細細長 臥後清宵 細細として長し

神女生涯原是夢 神女の生涯 原と是れ夢

小姑居處本無郎 小姑の居處 本と郎無し

風波不信菱枝弱 風波は菱枝の弱きに信さず

月露誰教桂葉香 月露 誰か桂葉をして香しからしめん

直道相思了無益 直ただひ相思つひ了つひに益無しと道ふも

未妨惆悵是清狂 未だ妨げず惆悵は是れ清狂なるを

石城(あるいは洛陽)の莫愁、巫山の神女、青溪の小姑と、三人の古えの美女たちがうたいこまれているが、表わしているのは一様に成就しない恋である。莫愁は幾重にも幃を下し、ひとりで臥せているが、よく晴れたすがすがしい夜の時間はごくごくわずかに時を刻み、とても長く感じられる。巫山の神女の一生は元来夢の中で過ぎてしまったのだし、青溪の小姑とて所詮ひとり身で過ごしていたのである。もともと添い遂げられない恋の定めなのである。頸聯は何を象徴しているかとらえにくいだが、「風波」ということばが、例えば李商隱の「鶯鶯」という詩に、

雌去雄飛萬里天

雌去り雄飛ぶ萬里の天

雲羅滿眼淚潸然

雲羅滿眼 淚潸然たり

不須長結風波願

長く風波の願ひを結ぶを須ひず

鎖向金籠始兩全

鎖もて金籠に向らしめて始めて兩つながら全し

とうたわれるように、運命や自然に翻弄される恋のイメージをもっているとするれば、風に起こされた波に揺られる菱枝と、月の露の恵みを待ちこがれる桂葉とは、どちらも不幸な恋に苦しむ者の象徴となる。尾聯は李商隱の恋愛詩の中でも最も極まった感情の表白であろう。たとい恋が全く無益なものだといっても、少くとも叶わぬ想いに憂え悲しむ気持ちは狂人ならざる狂人といえるほどに激しく純粹なものなのである。「清狂」ということは、『漢書』卷六三「昌邑王賀傳」に見え、狂人ではないが言行が狂人のようであることをいうが、のち、物事にこだわらず、放逸で俗人はなれしたさまをいうようになった。いわば反俗の精神をいうのであるが、ここでは反俗という積極的に主張する姿勢はそぐわないと思う。むしろ遂げられぬ想いがただ内に籠もり、心が閉鎖的になっていく状態において、紛らすことのできない悲しみの程度の激しさと一途さを表現していると思われる。恋そのものがまるで無益だといってみたところで、あふれる恋心が消し去れるわけではない。つゝの恋心ゆえに激しくなるばかりの悲しみは無駄なことだとわかったとて到底収まるものではない。「清狂」とはやはり狂人ならざる狂人なのであって、惆悵する心がどこまでも妥協をしないことをいうのである。

この詩は閨怨詩とは考えられない。典故に用いられているのが女性ばかりだとしても、本来表わそうとしていることが閨情ではない。みな不幸な恋の実相を知る李商隱が表象した現実なのである。彼は無残な現実を直視した上で、それ



でも抱きつづける恋情をいとおしんでいるのである。恋愛感情の不条理さ、不可思議さをこれほど見事に表現しえた詩人は李商隱を置いていないであろう。

李商隱の恋愛詩に描かれた恋の諸相は、これまで見てきた詩に端的に示されているように、不幸な恋のそれである。「昨夜」「相見」「來是」で始まる三首の無題詩のように、作者の肉声が響く、作者の現実と直接かかわっていると思われる詩があり、「颯颯」「重幃」で始まる無題詩のように、恋を主題にした詩もある。そのどちらの場合でも、現実の幸福には決して結びつかないと自覚している者のもつある種の疎外感が感じられる。恋愛そのものが当時において公然としたものでなかったため、そうした疎外感があるのは当然のことと思われるが、それが李商隱の恋愛詩に認められる独特な点なのである。宮詞や閨怨詩、また夫婦の愛をうたった詩などにはない抑圧された恋の実相が表現されているといえよう。

### 三

先に引用した紀昀の無題詩についての考えの中に、無題詩は詩中の字をとって題とした詩と変わらない、という指摘があった。無題ということ、詩中の字を題とすることは、詩の作られた時間、場所、状況を説明したり、詩の主題を示したりする詩題としての機能を果さないという点で同じである。となれば、詩中の字を題とする詩、すなわち借題詩についても考えるべきであろう。またまった数の無題詩は李商隱にしてはじめて見られるが、借題詩は李商隱以前にすでに見られる。いま、借題詩の先行例について概観してみよう。

借題詩はその淵源を辿れば『詩経』にまで遡ることができる。『詩経』の篇名はみな詩中の字からとられている。『詩

『詩經』の三一一篇のうち、六篇は詩序を残すのみで佚してしまった。のちの『世説新語』文学に晋の夏侯湛が「補亡詩」を作ったと見え、『抱朴子』鈞世に潘岳の「白華」などの補亡の詩があったと伝えるのは、佚した六篇を補おうと作られたものである。『文選』にも卷十九に「補亡」という部立てが詩の最初として置かれた。陶淵明にも「停雲四章并序」以下十篇の『詩經』に倣った借題詩がある。『詩經』に倣った借題詩や補亡詩は、唐代においても作られた。肅宗の至徳年間の進士願況に「上古之什補亡訓傳十三章」があり、開元中の人蕭穎士に「江有楓一篇十章并序」他四篇がある。以上挙げた借題詩、補亡詩は、みな『詩經』の四言の型を踏襲している。この四言の型が破られ、借題詩が詩体の自由を得るのは杜甫に始まる。その「曲江三章章五句」は、題は『詩經』にまねているが四言詩ではなく七言詩である。他に「不見」「秋盡」「黄河二首」「憶昔二首」など、杜甫には七十首の借題詩があり、詩体は古詩、律詩、絶句と様々である。四言のものにはやない。借題詩は杜甫以前以後とで一線を画すといえよう。杜甫以後、韓愈にも「幽懷」<sup>(8)</sup>「山石」「海水」など七首の借題詩があり、やはり詩体は自由になっている。また、韓愈には詩の冒頭二字を題とする他に「暮行河堤上」「長安交遊者贈孟郊」のように、詩の第一句を題としたり、それに続けて人に贈ると記した題もあるが、借題の類であるにはちがいない。杜甫と韓愈の借題詩は、詩体が自由なばかりではなく、詩の内容にも特に顯著な方向は見出せない。

李商隱の借題詩は詩の冒頭二字を題とするものが三十四首、題に異同があるものも数えれば三十七首ある。詩中の二字を題とするものも含めれば、その数はさらに増すが、借題詩と見倣してよいのかどうか容易に判断できない場合もある。ともあれ、詩の冒頭二字を題とする借題詩は、おそらく杜甫や韓愈の影響を受けているであらう。李商隱がことに杜甫や韓愈に注意を払っていたらしいことは、その詩に「杜工部蜀中離席」「韓碑」などがあることによってもわかる。

李商隱の借題詩は、紀昀が無題詩（そのほとんどが艶詩）と同じであると考えたように、艶詩が多い。しかし、「自喜」「商於」「人欲」「明神」など、艶詩でない詩もかなりあるのである。また、詩体も五言排律の「碧瓦」や「鏡檻」など、無題詩にない詩体もあり、その多様性は無題詩よりも一層甚しい。詩体、内容ともに粹をもたない点で、杜甫や韓愈の借題詩と同様である。

無題詩を特色づけるのは、やはり先に示した恋愛詩の存在であると思われるが、しかし、借題詩にも、ただ艶体の詩だとして考えられない作がある。例えば、「碧城三首」が挙げられよう。

碧城十二曲闌干 碧城十二 曲闌干

犀辟塵埃玉辟寒 犀は塵埃を辟け玉は寒を辟く

閨苑有書多附鶴 閨苑 書の多く鶴に附す有り

女牀無樹不棲鸞 女牀 樹として鸞を棲ましめざる無し

星沈海底當窗見 星の海底に沈むは窗に當って見え

雨過河源隔座看 雨の河源を過ぐるは座を隔てて看る

若是曉珠明又定 若是是れ曉珠 明又た定まれば

一生長對水晶盤 一生長く對せん水晶盤

「碧城三首」の第一首であるが、詩的空間はもっぱら仙界に設定され、塵埃も寒さも寄せつけない清浄な世界が描かれる。地上での束縛から解放された世界である。閨風の苑では恋文がしばしば鶴に託され、女牀の山の樹にはみな鸞鳥が棲んでいる、というのは、自由な恋の樂園を想像させる。東は星が海底に沈むのが窓から見え、西は雨が河源を降り

過ぎてゆくのが恋人と向かい合って座ったままで見られる。仙界の高みに身を置けば、地上の様子は限なく見渡せるのである。もし、暁の真珠の輝きが明るいまま変わらないものなら、一生このまま真珠を乗せた水晶盤に向かつていよう、と結んでいるのは、清浄で自由な仙界にいつまでもとどまっていたい、という李商隱の願いであろう。「碧城三首」の第一首は、仙界という現実を離れた空間を得て、作者の幻想が自由に展開し、いわば恋の理想郷を表現している。従って、無題詩の恋愛詩に見られる現実と地続きの暗い情念や、抑圧された現実認識は、この詩には見出せない。第二首も仙界に取材した詩といえるが、恋の理想郷を描いた第一首とはちがって、想いを遂げられない女性を仙女に喩えている。その尾聯に、

鄂君悵望舟中夜 鄂君 悵望す舟中の夜

繡被焚香獨自眠 繡被 香を焚きて獨り自ら眠る

とあり、楚の鄂皙が越の舟人に歌で讀えられ、鄂皙はその舟人を繡被で覆ったという故事を用いて、讀えてくれる人もなくひとり眠る淋しさをうたっているが、李商隱の肉声が響くといったほどの切実な感情はこもっていない。第三首もやはり仙界にかかわる「漢武内傳」に取材し、同時に牽牛織女の逢瀬をも重ねあわせている。尾聯に、

武皇内傳分明在 武皇の内傳 分明に在り

莫道人閑總不知 道ふ莫かれ 人閑總べて知らずと

とうたい、仙界と人間界との繋がりを確かな真実として主張する。仙界という恋の理想郷が決して現実とは無縁のものではないことを、そうあってほしいという期待をこめつつ主張するのである。「碧城三首」は幻想的な恋のイメージが自由に像を結んで表現されている。それゆえ本事と結びつける解釈をしようとしても不可能であるし、その必要を感じ

させない。また恋を主題とする点で、「颯颯」「重幃」で始まる無題詩と同じであるが、恋を悲観的にとらえる無題詩のほうは、恋の実相を写していて、「碧城三首」が総括的にみて恋の理想を描くのととは対照的である。

さらに無題詩における恋愛詩と比較しうる借題詩として、「促漏」が挙げられよう。

促漏遙鐘動靜聞 促漏 遙鐘 動靜聞ゆ

報章重疊杳難分 報章重疊 杳として分かち難し

舞鸞鏡匣收殘黛 舞鸞の鏡匣 殘黛を收め

睡鴨香爐換夕熏 睡鴨の香爐 夕熏を換ふ

歸去定知還向月 歸り去り定めて知る還た月に向かふを

夢來何處更爲雲 夢み來り何れの處にか更に雲と爲らん

南塘漸暖蒲堪結 南塘 漸く暖く 蒲結ぶに堪へ

兩兩鴛鴦護水紋 兩兩鴛鴦 水紋を護る

急ぎ立てるように続く漏刻の水音と、遙かに時を告げる鐘の音とが、一つは活発に、一つは静かに聞こえてくる。返事の手紙にはあれこれと書かれていて、その気持ちを讀みとるのは難しい。頸聯は典型的な閑閑の描写である。頸聯は、仙薬を盗み、羽を裏切つて月に奔つた姮娥の故事と、朝雲暮雨となった巫山の神女の故事をふまえていて、想う女性が姮娥のように去ってしまったことを思い知り、もはやどこで会えるものやらわからない、という男性の側からの嘆きを表現している。南の池は段々暖くなり、蒲も結べるほどに伸び、番いの鴛鴦たちが仲よく寄り添って一組づつ一つの水紋をつくっているのに。

「促漏」は悼亡詩とも解釈されているが、悼亡としては、首聯落句の「報章」の表現がそぐわないであろう。恋の不幸な側面をうたう点で、無題詩の恋愛詩と変わらないが、率直な恋愛感情の表現という点からみれば、無題詩のほうが直接的で清新な表現をしていると思う。「昨夜の星辰昨夜の風」で始まる無題詩のように、内に秘めた思いを吐露するような深いところから発せられた抒情は、この詩には見出せない。

借題詩と無題詩との相異について、恋愛詩に限ってみた場合、あまり明確には現われていない。しかし無題詩の恋愛詩のほうが李商隱自身のごく私的な事情を思わせ、抑圧された恋愛感情が、より直截に表現されていると思う。無題詩における恋愛詩の存在は、やはり無題詩本来の性格に大きくかわると思われる。その点、借題詩においては、その中に恋愛詩を見出しても、全体としての多様性は変わらない、という状態とは異なる。無題詩と借題詩とのかわりはお今後考究すべき課題であるが、借題詩の多様性と無題詩の不整合とは、やはり別個に考えられるべきであろう。

### 註

- (1) ほほ同様の記述が『四庫全書總目提要』卷一五一集部別集類四「李義山詩註三卷附錄一卷」提要に見える。
- (2) 馮浩『玉谿生詩箋註』卷一
- (3) 馮浩『玉谿生詩箋註』卷三
- (4) 張采田『玉谿生年譜會箋』卷四 大中五年辛未 義山四十歲 編年詩
- (5) 馮浩『玉谿生詩箋註』卷三
- (6) 李商隱には「當句有對」と題した詩がある。四部叢刊『李義山詩集』卷五
- (7) 杜牧の『樊川文集』に附された外集にこの詩を収め、「寄題宣州開元寺」と題す。
- (8) 吉川幸次郎『杜甫詩註』第一冊「曲江三章章五句」の註に拠った。